

報道関係者各位

人とペットが作る笑顔あふれる社会のために

マース ジャパン リミテッド News Letter

January 2009
[Vol.22]

「ペットの避妊を考える」

寒さはまだこれからが本番。それでも冬至を過ぎてから、少しずつではありますが日が長くなってきているのを感じます。この太陽の傾きは動物たちの生命のサイクルに大きな影響を与えています。特に猫のベビーラッシュは、日照時間とともに深い関わりを持っているのです。一般的に、猫は早ければ月齢4ヶ月、通常10ヶ月齢程度で、日照時間が長くなる春から晩夏にかけて年2、3回、発情期を迎えるようになります。ただ、室内飼育の場合には日照時間や気温の変化に影響されることが少ないため、必ずしもこれに当てはまらないケースも増えていますが、外で飼育されている猫や野良猫たちの状況を考えると、本格的な春が来る前に、愛猫のバース・コントロール(避妊)について考えておいたほうが良いでしょう。

一方、犬の場合は、発情期の時期や周期は季節とは関係なく、犬ごとに異なります。通常、月齢約10ヶ月以降のメスに年2回発情期があり、オスはメスに影響されていつでも発情できるようになっています。メスの場合には愛犬の健康状態をチェックすることでこのサイクルを把握することができますが、オスの場合にはオーナー側で管理することは難しいといえます。

ペットの飼育責任の対象は、今飼育しているペットのみならず、そのペットが育む新しい命までを含みます。ペットオーナーは、ペットの命のサイクルを理解し、ペットの雌雄に関わらず、その子どもが誕生したらどうするのか、バースコントロールはどうかまで考えなくてはなりません。新しい命を家族として迎えることができる、あるいは飼い主を確実に見つけることができるのであればそれ以上幸せなことはありません。でも、もし生まれてくる子犬・子猫を責任持って最後まで飼育できる環境にないのであれば、適切な避妊を行う必要があります。発情期のペットを他のペットと絶対に接触させないのも一つの対処法ですが、ペットのストレスや確実性を考慮すれば、不妊・去勢手術も選択肢の一つとして考えることができます。

不妊・去勢手術の副作用として、ペットによっては多少太りやすくなることがあげられますが、食事のコントロールで解消可能です。その一方で、健康面でのメリットにも注目する価値がありそうです。手術を受けることによって、犬・猫とも、オスであれば精巣・前立腺腫瘍、メスであれば子宮蓄膿症、卵巣腫瘍、乳腺腫瘍などの罹患率が激減します。また、発情期を我慢させることによるペットのストレスが軽くなり、オスであれば部屋中にマーキングするといった問題行動もなくなります。

ペットの不妊・去勢手術については、もちろんいろいろな考え方があります。最終的には、飼育環境やペットの健康状態などについて獣医師に相談し、ペットオーナーが手術について十分理解した上で、納得のいく選択をすることが大切です。残念ながら、日本では一部の無責任な飼育により、年間30万頭以上の犬や猫が殺処分されているという現実があります。ペットの避妊について理解が進み、不妊・去勢手術がより推進されれば、この悲しい現状はかなり改善されるとみられています。そして、多くの自治体でも改善に向けて猫の不妊・去勢手術に対する助成金制度の設置などを行っています。命の大切さを考えるためにも、私たちはペットの避妊についてしっかりと考え、理解を深める必要があるのではないのでしょうか。

マース ジャパンは、製品や社会貢献活動を通して、人とペットが共に暮らす笑顔あふれる社会の実現を目指しています。このニュースレターは、マース ジャパンが人とペットの共生をテーマにした研究や支援活動を目的に1997年に設立したリサーチセンターである非営利団体コンパニオンアニマル リサーチ(CAIRC)とマース オーストラリアがサポートするコンパニオンアニマルに関わる活動を推進しているPIASと協力して発行しています。

お問い合わせ: マース ジャパン リミテッド 広報室 小川 電話:03-5434-3334